

【梁紀二】 起旃蒙作噩，盡強圉大淵獻，凡三年。

■梁、●北魏、統国訳漢文大成 經子史部 第8卷 308p

高祖武皇帝二天監四年（乙酉，505年）

■「梁の教育と人材登用」**春，正月**，癸卯（39-39+1=1日、元嘉曆とも一致）朔，詔して曰く、

「二漢（前漢後漢）は賢を登すは，經術（儒教による統治の法）に非ざるは莫く，雅道を服膺（服は着ける、膺は胸、奉持してこれを心胸の間に着ける）し，名立ち行い成る。魏、晉は浮蕩し，儒教は淪歇（衰退）し，風節の樹つ罔きは，抑々此に之れ由る。《五經》博士各々一人を置き，廣く館宇を開き，後進を招内（招き入れる）する可し。」是に於いて賀瑒及び平原の明山賓、吳興の沈峻、建平の嚴植之を以て博士に補し，各々一館を主らしめ，館には數百生有り，其の餼廩を給し，其の射策（対策）の通明なる者は即ち除して吏と為し，期年之間に，經を懷き笈を負う者は雲のように會す。瑒は，循（晉氏南渡の初め、賀循を儒宗とする）之玄孫也。又た學生を選び，會稽の雲門山（時に何胤は雲門山に隠れる、浙江省會稽道紹興県の南、亦東山という、現・紹興市柯橋区）に往き、（8-309p）何胤に従いて業を受けしむ，胤に命じ門徒の中の經明らかに行修する者を選び，具に名を以て聞せしむ。博士祭酒を分遣して州郡を巡りて學を立てしむ。

【漢中大騷動】

■●「夏侯道遷は梁魏に右往左往」初め，譙國の夏侯道遷は輔國將軍を以て裴叔業に従い壽陽に鎮し，南譙（齊の南譙は歴陽の西界か）太守と為る。叔業と隙有り，單騎にして魏に奔る。魏は道遷を以て驍騎將軍と為し，王肅に従いて壽陽に鎮せしめ，道遷をして合肥を守らしむ。肅は卒し，道遷は戍を棄てて（梁に）來奔し，梁、秦二州刺史の莊丘黑に従いて南鄭に鎮す。道遷を以て長史と為し，漢中太守を領せしむ。黑は卒し，詔して都官尚書の王珍國を以て刺史と為す，未だ至らずして，道遷は陰に軍主の考城の江忱之等と魏に降らんと謀る。

■●「夏侯道遷は漢中で魏に降る」是より先，魏の仇池の鎮將の楊靈珍は魏に叛して來奔し（141 卷齊の明帝建武四年にあり），朝廷は以て征虜將軍と為し，武都王を假し，助けて漢中に戍せしめ，部曲六百餘人有り，道遷は之を憚る。上は左右の吳公之等を遣わして南鄭に使いせしむ。道遷は遂に使者を殺し，兵を發して靈珍父子を撃ち，之を斬り，使者の首を並せて魏に送る。白馬の戍主の尹天寶（君天寶×）は之を聞き，兵を引いて道遷を撃ち，其の將の龐樹を敗り，遂に南鄭を圍む。道遷は救いを氏王の楊紹先、楊集起、楊集義に求め，皆な應じず，集義の弟の集郎は獨り兵を引いて道遷を救い，天寶を撃ち，之を殺す。魏は道遷を以て平南將軍、豫州刺史、豐縣侯と為す。又た尚書の刑巒を以て鎮西將軍と為し，征梁、漢諸軍事を都督せしめ，兵を將いて之に赴かしむ。道遷は平南を受け，豫州を辭し（梁州を欲しがった），且つ公爵を求め，魏主は許さず。

■辛亥（47-39+1=9日），上は南郊に祀り，大赦す。

●乙丑（1+60-39+1=23日），魏は驃騎大將軍の高陽王の雍（元雍、～528）を以て司空と為し，尚書令の廣陽王の嘉（元嘉、～511）に儀同三司を加える。

●二月，丙子（12-8+1=5日），魏は宕昌の世子の梁彌博を以て宕昌王と為す。

■上は魏を伐たんと謀り，壬午（18-8+1=11日），衛尉卿の楊公則を遣わして宿衛兵を將いて洛口（洛澗

は北して秦虚を経て淮水に注ぐ口。陝西省漢中道洋県、現・漢中市洋県）を塞がしむ。

■壬辰（28-8+1= 2 1 日）、交州刺史の**李凱**は州に據りて反し、長史の**李爰**は討ちて之を平らぐ。

●**〔魏の邢巒は漢中制覇、氏の楊集起ら反す〕**魏の**邢巒**は漢中に至り、諸城戍を撃ち、向かう所摧破す。

晉壽太守の**王景胤**は石亭（漢水は武興城北より西南流して關城の北を経て、西して石亭戍を経て、晉壽城に西を経る。四川省嘉陵道廣元県、現・広元市利州区）に據り、**巒**は統軍の**李義珍**を遣わして撃ちて之を走らす。魏は**巒**を以て梁、秦二州刺史と為す。巴西太守の**龐景民**は郡に據りて下らず、郡民の**嚴玄思**は衆を聚めて巴州刺史を自稱し、魏に付き、**景民**を攻める、之を斬る。**楊集起**、**集義**は魏が漢中に克つを聞き而して懼れ、**閏月**（元嘉曆一致）、群氏を帥いて魏に叛し、漢中の糧道を斷ち、**巒**は屢々軍を遣わして撃ちて之を破る。

■**夏**，**四月**，丁巳（43-37+1= 7 日），行宕昌^{とうしょう}（甘肅省蘭山道岷県、現・隴南市宕昌県）王の**梁彌博**を以て河、涼二州刺史、宕昌王と為す。

■●**〔梁州大半は魏に属す〕**冠軍將軍の**孔陵**等は兵二萬を將して深杭に戍し、**魯方達**は南安（四川省嘉陵道劍閣県、現・広元市劍閣県）に戍し、**任僧褒**等は石同に戍し、（8-310p）以て魏を拒む。**刑巒**は統軍の**王足**を遣わして兵を將いて之を撃たしめ、至る所皆な捷ち、遂に劍閣に入る。**陵**等は退きて梓潼を保ち、**足**も又た進撃して之を破る。梁州十四郡の地、東西七百里、南北千里は、皆な魏に入る。

■**〔鄧元起を漢中に派遣〕**初め、益州刺史の當陽侯の**鄧元起**は母の老いるを以て歸るを乞う。詔して征して右衛將軍と為し、西昌侯の**淵藻**を以て之に代わらしむ。**淵藻**は、**懿**（東昏侯の手に死す）之子也。**夏侯道遷**之叛く也、**尹天寶**は使いを馳せて**元起**に報じる。魏の晉壽を寇すに及び、**王景胤**等は並びて遣わして急を告げ、衆は**元起**に急に之を救うを勧め、**元起**は曰く、

「朝廷萬里にして、軍は猝に至らず、若し寇賊侵淫^{ようそ}（癰疽を以て喩えと為す、悪性腫瘍で、毒は好肉を侵すを淫肉と為す）すれば、方に須く撲討すべし、董督之任は、我に非ず而して誰か、何事ぞ匆匆として之を救わん！」詔して**元起**に都督征討諸軍事を假し、漢中を救わしめ、而して晉壽は已に陥つ。

■**〔私怨で殺した蕭淵藻を降格のみ〕****蕭淵藻**は將に至らんとし、**元起**は還装を營み、糧儲器械は、之を取りて遣す無し。**淵藻**は城に入り、之を恨む。又た其の良馬を求（救×）め、**元起**は曰く、

「年少の郎子は、何ぞ馬を用いるを為さん！」

淵藻は^{いか}悲り、醉に因りて、之を殺し、**元起**の麾下は城を圍み、哭し、且つ故を問い、**淵藻**は曰く、「天子の詔有り。」

衆は乃ち散る。遂に誣うるに反を以てし、上は焉を疑う。**元起**の故吏の廣漢の**羅研**は闕に詣りて之を訟え、上は曰く、

「果たして我の量る所の如き也！」

淵藻を讓め使めて曰く、

「**元起**は汝が為に仇を報ず（力を協せて東昏侯を誅し共に父の仇を報いるをいう）、汝は仇の為に仇を報ず、忠孝之道は如何！」

乃ち**淵藻**の號を貶して冠軍將軍と為す。**元起**に征西將軍を贈り、諡して忠侯と曰う。

■**〔梁の刑罰は緩く、滅亡を急ぐ原因となる〕****李延壽**は論じて曰く、**元起**は勤めは乃ち胥附（下を率いて上に親しむ）し、功は惟れ土を闢き（梁益の土を開く）、勞を之れ圖らず、禍機（禍のきっかけ）に先ず陷る。冠軍之貶は、罰に於いて已^{はなは}だ輕し。梁之政刑は、斯に於いて失せりと為す。私戚之端は、斯より而して啟^{ひら}く。年之永からざるは、亦た宜^{うべ}ならず乎！

■**〔蕭淵藻が護衛を下げて人心安らぐ〕**益州の民の**焦僧護**は衆數萬を聚めて亂を作し、**蕭淵藻**は年は未だ

弱冠（二十才以下）ならず、僚佐を集め自ら之を撃たんと議す。或は可からずと陳べ、淵藻は大いに怒り、階側にて於いて斬る。乃ち平肩輿（人が肩に担ぐ輿）に乗りて賊壘を巡行す。賊の弓は亂射し、矢下ること雨の如し、従者は楯を舉げて矢を御ぎ、淵藻は命じて之を去らしむ。是に由りて人心は大いに安んじ、僧護等を撃ちて、皆な之を平らぐ。

■**六月**，庚戌（46-36+1=1 1 日），初めて孔子廟を立てる。

■●**〔王超宗は小峴を包囲、敗退〕**豫州（梁は晉熙に置く、安徽省潜山県治、現・安慶市潜山市）刺史の**王超宗**は兵を將いて魏の小峴を圍む。丁卯（3+60-36+1=2 8 日），魏の揚州刺史の**薛真度**は兼統軍の**李叔仁**等を遣わして之を撃たしめ、**超宗**の兵は大敗す。

■●**〔王足は涪城に逼る〕**冠軍將軍の**王景胤**、**李叟**、輔國將軍の**魯方達**等は魏の**王足**と戦い、屢々敗れる。**秋**，**七月**，足は進みて涪城に逼る。

●**八月**，壬寅（38-35+1=4 日），魏の中山王の**英**は雍州を寇す。（8-311p）

■●**〔梁魏の乱戦模様〕**庚戌（46-35+1=1 2 日），秦、梁二州刺史の**魯方達**は魏の**王足**の統軍の**紀洪雅**、**盧祖遷**と戦い、敗れ、**方達**等十五將は皆な死す。壬子（48-25+1=2 4 日），**王景胤**等は又た**祖遷**と戦（城×）い、敗れ、**景胤**等二十四將は皆な死す。

■●**〔楊公則是北伐〕****楊公則**は洛口に至り、魏の豫州長史の**石榮**と戦い、之を斬る。甲寅（50-25+1=2 6 日），將軍の**姜慶真**は魏と羊石（蓋し即ち陳伯之が屯する陽石ならん）に戦い、利あらず、**公則**は退きて馬頭に屯す。

■●雍州蠻の沔東太守の**田青喜**（拠る所は襄陽の東、竟陵の西にあるべし）は叛して魏に降る。

●**〔崔光は魏主の遊樂に苦言〕**魏に芝有り太極殿之西序に生ず、**魏主**は以て侍中の**崔光**に示し。**光**は上表して、以為く、

「此れ《莊子》の所謂『氣蒸して菌を成す』者也。柔脆之物は、墟落穢溫之地に生じ、當に殿堂高華之處に生ずべからず。今忽ち之有り、厥の狀は扶疏たり、誠に異とするに足る也。夫れ野木は朝に生じ、野鳥は廟に入るは、古人皆な以て敗亡之象と為す、故に太戊（商王太戊の時に亳に祥有り、桑穀共に朝に生じ、一日の暮れに大さ拱なり。太戊は懼れて徳を修め、祥桑枯死して殷道復た興る）、中宗（まさに高宗にすべし。高宗は成湯を祭る。飛雉有り、鼎の耳に升りて雉く。祖己、進言する所あり。高宗は徳を修め殷道復た昌なり）災いを懼れ徳を修め、殷道以て昌なり、所謂『家利に而して怪先だち、國興り而して妖豫めする』者也。今西南の二方、兵革は未だ息まず、郊甸之内、大旱は時を逾え、民勞し物悴えること、此より之甚だしきは**菲**（**續**は**莫**）し、天を承け民を育てる者は宜しく矜恤すべき所なり。伏して願わくは**陛下**は躬を側て意を**聳**かし、聖道を新らしくするを**惟**い、夜飲之樂しみを節し、方に富む之年を養い、則ち魏祚は以て永隆なる可く、皇壽は山嶽に等しからん矣。」是に於いて**魏主**は宴樂を好み、故に**光**の言は之に及ぶ。

●**九月**，己巳（5-5+1=1 日），**楊公則**等は魏の揚州刺史の**元嵩**と戦い、**公則**は敗績す。

■**冬**，**十月**，丙午（42-34+1=9 日），上は大舉して魏を伐ち、揚州刺史の臨川王の**宏**を以て北討諸軍事を都督せしめ、尚書右僕射の**柳惔**を副と為し、王公以下各々國租（国に入る租税）及び田穀（職田に入る穀）を上り以て軍の助けとす。**宏**は洛口に軍す。

■●**〔楊紹先は帝を称す〕****楊集起**、**集義**は**楊紹先**を立てて帝と為し、自ら皆な王を稱す。**十一月**，戊辰（4-4+1=1 日、元嘉曆一致）朔、魏は光祿大夫の**楊椿**を遣わして兵を將いて之を討たしむ。

●**〔刑巒は魏主に蜀全面侵攻を説く〕**魏の**王足**は涪城を圍み、蜀人は震恐し、益州の城戍の魏に降る者は

什に二三、民の自ら名籍を上る者は五萬餘戸。刑轡は魏主に表し、勝ちに乗りて蜀を取るを請い、以為く、「建康、成都、相い去ること萬里、陸行は既に絶え（梁州を魏に取られて陸路無し）、惟だ水路に資る。水軍は西上するは、周（同×）年に非ざれば達せず、益州は外に軍援無く、一に圖る可き也。頃おい劉季連の反する（前漢元年二年にあり）を経て、鄧元起は攻圍し、資儲は空竭し、吏民は復た固守する之志無きは、二に圖る可き也。蕭淵藻は裙屐（裙は下裳、屐は躡。ただ自ら修飾するのみにて重きに任ずる器でない）の少年、未だ治務に洽かず、宿昔の名將は、多く囚戮せられ、今之任ずる所は、皆な左右の少年なり、三に圖る可き也。蜀之恃む所は、唯だ劍閣に在り、今既に南安に克ち、已に其の險を奪い、（8-312p）彼の竟内に據ること、三分して已に一なり。南安より涪に向かうに、軌を方ぶるに礙える無し、前軍は累りに敗れ、後衆は魄を喪い、四に圖る可き也。淵藻は是れ蕭衍の骨肉の至親なり、必ず處（続は死）する理無し、若し涪城に克てば、淵藻は安んぞ肯（青×）えて城中に坐し而して困を受けん、必ず將に風を望みて逃げ去らん。若し其れ出でて鬥えば、庸（上庸の地）、蜀（蜀郡の地）の士卒は驚怯にして、弓矢は寡弱なり、五に圖る可き也。臣は内省（自ら反省）するに文吏にして、軍旅を習わず、將士が力を竭くすに頼り、頻る薄捷有り。既に重阻（重險）に克ち、民心は懷服す、涪（梓潼の太守が涪城に治す）、益（益州刺史が成都に治す）を瞻望するに、旦夕に屠（続は圖）る可し。正（続は止）に兵少なく糧匱しきを以て、未だ宜しく前出すべからず、今若し取らざれば、後圖は便ち難し。況んや益州は殷實なり。戸口は十萬、壽春、義陽（魏が既に得たり）に比べて、其の利は三倍なり。朝廷が若し進取せんと欲すれば、時は失う可からず。若し境を保ちて民を寧んぜんと欲すれば、則ち臣は此に居るとも事無し、乞う歸りて侍養（親の側に侍して奉養する）せん。」

魏主は詔して以て、

「平蜀之舉は、當に更に後敕を聽くべし。寇難は未だ夷（たい）らがず、何ぞ親を養うを以て辭と為すを得ん！」
轡は又た表稱す、

「昔鄧艾、鐘會は十八萬の衆を帥いて、中國の資儲を傾けて、僅に能く蜀を平らげる。然る所以の者は、實力を斗わせば也。況んや臣の才は古人に非ず、何ぞ宜しく二萬之衆を以て而して蜀を平らぐを希うや！敢てする所以の者は、正に要險を據得し、士民が義を慕い。此の往くは則ち易く、彼の來たるは則ち難く、力に任せて而して行き、理克つ可き有るを以てなり。今王足は已に涪城に逼り、脱し涪を得れば、則ち益州は乃ち擒と成る之物なり、但だ之を得ること早晚有る耳。且つ梓潼は已に付き民戸（既に名籍を上る民）は數萬あり、朝廷は豈に守らざる可けんや！又た、劍閣の天險は、得て而るに之を棄てるは、良に惜しむ可き矣！臣は誠に知る戰伐は危事にして、未だ為す可きこと易からず。軍が劍閣を度るより以來、鬢髮は中ば白くなり、日夜戰懼す、何ぞ心と為す可けんや！勉強する所以の者は、既に此の地を得而も自ら退きて守らざれば、陛下之爵祿に負くを恐れるが故也。且つ臣之意算は、正に先ず部城を取りて、以て漸く而して進まんを欲す。若し涪城を得れば、則ち益州之地を中分し、水陸之冲（続は衝）を斷たん。彼は外に援軍無く、孤城自ら守れば、何ぞ能く復た持久せん哉！臣は今軍軍をして相い次ぎ、聲勢連接せ使め、先ず萬全之計を為し、然る後に功を圖らんと欲す。之を得れば則ち大利なり、得ざれども則ち自ら全くす。又た、巴西、南鄭は、相い距てること千四百里、圖州を圖ること迢遞（遙かに遠し）にして、恆に擾動多し。昔南に在る之日、其の統緒の勢い難きを以て、曾て巴州（135 卷齊の高帝建元二年にあり、武帝の永明元年に廢す）を立て、夷、獠を鎮靜し、梁州は利に藉り、因りて而して表して罷む。彼の土の民望、嚴、蒲、何、楊は、唯だ一族のみに非ず、山谷に率い居ると雖も、而も豪右は甚だ多く、文學風流も、亦た少なからずと為す、（8-313p）但だ州を去ること既に遠きを以て、仕進するを獲ず。州綱（州の上佐）に至るまで、跡（続は迹）を脩（まじ）うる由無し、是を以て郁快（続は鬱快、鬱々として樂しまず）として、多く異圖を生ず。比（このごろ）道遷の建義之始

め、**嚴玄思**は自ら巴州刺史と號し、城に克ちて以來、仍って事を行わ使む。巴西は廣袤（左右東西の廣さ）千里、戸は四萬餘り、若し彼に於いて州を立て、華、獠を鎮攝すれば、則ち大いに民情を貼（続は帖）らん、墊江より已還は（墊江は四川省東川道合川県治、現・重慶市墊江県、墊江以西、胡三省曰く、李雄・譙縱は蜀を取り、東は墊江を過ぎる能わず、苻秦は兵力の盛んなるを以て、梁益を取るに掌を反すが如きなりしが、墊江以東は苻秦は有す能わず、邢巒が蜀を図るも亦墊江以西を規るのみと。）、征伐を勞せず、自ら國有と為らん。」

魏主は從わず。

●■ **[王足は梁に投降し、魏の益州侵攻軍は自壊]** 是より先、**魏主**は**王足**を以て益州刺史を行わしむ。上は天門太守の**張齊**を遣わして兵を將いて益州を救わしめ、未だ至らず、**魏主**は更に梁州軍司の泰山の**羊祉**を以て益州刺史と為す。**王足**は之を聞き、悦ばず、輒ち兵を引いて還り、遂に蜀を定める能わず。之久しく、**足**は魏より來奔す。**刑巒**は梁州に在り、豪右に接するに禮を以てし、小民を撫でるに惠を以てし、州人は之を悦ぶ。**巒**之巴西に克つ也、軍主の**李仲遷**をして之を守ら使む。**仲遷**は酒色に溺れ、兵儲を費散し、公事諮承するは、能く見る者無し。**巒**は之を忿りて切齒し、**仲遷**は懼れ、叛を謀り、城人は其の首を斬りて、城を以て來降す。

● **十二月**，庚申（56-33+1=24日），魏は驃騎大將軍の**源懷**を遣わして武興の氐を討たしむ、**刑巒**等は並びて節度を受ける。

■ 司徒、尚書令の**謝朏**は母の憂を以て職を去る。

■ 是の歲、大いに穰り、米は斛三十錢なり。

高祖武皇帝二天監五年（丙戌，506年）

● **春，正月**，丁卯（3-3+1=1日）朔，魏の**於后**は**子昌**を生み、大赦す。

● **[仇池武興の滅亡]** **楊集義**は魏の關城（陽平の關城、陽安關、陝西省漢中道寧羌県西北百里、現・漢中市寧強県、漢中盆地西北門戶、寶成鐵路と陽安鐵路の交差点。漢代には古陽平關は勉県武侯鎮の白馬河匯入漢水の處にあり）を圍み、**刑巒**は建武將軍の**傅豎眼**をして之を討たしめ、**集義**は逆え戦い、**豎眼**は之を撃破す。勝ちに乗りて北げるを逐い、壬申（8-3+1=6日）、武興に克ち、**楊紹先**を執り、洛陽に送る。**楊集起**、**楊集義**は亡げ走る。遂に其の國（晉の惠帝元康六年296年に氐王楊茂搜は始めて仇池百頃に據る、その後漢の武都郡を保ち北は隴西天水、南は漢中を侵す、これを前仇池～371。後仇池は385～442、武都し443-477。拓跋既に盛んにして武都仇池を取り、477年楊氏は武都に據り、遂に滅ぼす。その後も命脈は保つ）を滅ぼし、以て武興鎮と為し、又た改めて東益州（武興・仇池・盤頭・廣業。梓潼・洛叢郡を領す）と為す。

■ 乙亥（11-3+1=9日）、前司徒の**謝朏**を以て中書監、司徒と為す。

■ 冀州刺史の**桓和**は魏の南青州を撃ち、克たず。（梁の青冀州は鬱州、江蘇省徐海道灌雲県の東北の海中、現・連雲港市灌雲にあり、魏の顓祖は三齊を取り東徐州を圍城に置く、山東省濟寧道沂水県、現・臨沂縣東南、これが続の圍城なら濟寧道莒県、現・日照市莒県。高祖太和22年改めて南青州と為す）

● **[屠各の各勢力自立へ]** 魏の秦州の屠各王の**灋智**（続は法智、灋の略字が法）は衆二千を聚め、秦州の主簿の**呂苟兒**を推して主と為し、改元して建明とし、百官を置き、逼州郡（魏は逼州を置き、臨涇城、甘肅省涇原道鎮原県、現・慶陽市鎮原県臨涇鎮に治し、安定・隴東ろ新平・趙平・平涼・平源などの郡を領す）を攻める。涇州民の**陳瞻**も亦た衆を聚めて王と稱し、改元して聖明とす。（8-314p）

● 己卯（15-3+1=13日）、**楊集起**兄弟は相い帥いて魏に降る。

■ 甲申（20-3+1=17日）、皇子の**綱**を封じて晉安王と為す。

● 「魏主の直言忠諫詔勅は意味なし」 二月，丙辰（52-32+1=2 1 日），魏主は王公以下（以上×）に詔して直言忠諫せしむ。治書侍御史の陽固は上表し、以為く、

「當今之務めは、宜しく宗室に親しみ、庶政を勤め、農桑を貴び、工賈を賤しみ、虚を談じ微を窮める之論を絶ち、桑門（仏教僧）無用之費えを簡にし、以て饑寒之苦を救うべし。」

時に魏主は高肇に委任し、宗室を疏薄にし、桑門之法を好み、親ら政事をせず、故に固の言は之に及ぶ。

● 戊午（54-32+1=2 3 日），魏は右衛將軍の元麗を遣わして諸軍を都督せしめて呂苟兒を討たしむ。麗は、小新成（129 卷宋の孝武帝大明五年にあり）之子也。

■● 乙丑（1+60-32+1=3 0 日），徐州刺史の歴陽の昌義之は魏の平南將軍の陳伯之と梁城（晉の孝武帝太元中に梁郡を淮南の壽春の界に僑立す、壽陽東北、鐘離の西南）に戦い、義之は敗績す。

■ 「梁は淮陽包囲」 將軍の蕭曷は兵を將いて魏の徐州を撃ち、淮陽（角城は淮水の陽に在り。淮陽はまた角城の北 18 里に在り、宿預に治す。梁後に角城において淮陽郡を置く）を圍む。

■ 三月，丙寅（2-2+1=1 日）朔，日之を食する有り。

● 己卯（15-2+1=1 4 日），魏の荊州刺史の趙怡、平南將軍の奚康生は淮陽を救う。

●■ 「魏の元翼は梁に來奔」 魏の咸陽王の禧（144 卷齊の和帝の中興元年に誅殺される）之子の翼は、赦に遇い、其の父を葬らんことを求める。屢々泣いて魏主に請い、魏主は許さず。癸未（19-2+1=1 8 日），翼は其の弟の昌、暉と來奔す。上は翼を以て咸陽王と為し、翼は暉が嫡母の李妃之子也を以て、爵を以て之に讓るを請い、上は許さず。

■ 輔國將軍の劉思效は魏の青州刺史の元繫を膠水（川の名、山東省膠東道にあり）に敗る。

■ 「陳伯之は説得で來降す」 臨川王の宏は記室の吳興の丘遲をして書を為りて陳伯之に遣ら使めて曰く、「君が去就之際を尋ねるに、它故有るに非ず、直だ内に諸々を己に審らかにする能わず、外に流言を受けるを以て、沈迷猖蹶して、以て此に至る。主上は法を屈して恩を申べ、吞舟を是れ漏らす（寛大、漢は秦の法苛酷に凝り、禁固は疏闊なり、時に称して吞舟の魚を漏らすと為す）、將軍の松柏は翦られず（先世の墳墓を毀夷せず）、親戚は安居し（その親戚の江南に在る者は皆叛党を以て連座せず、安居自若たり）、高台は未だ傾かず（居第未だ嘗て汗瀦・死水溝たらず、池台は故の如し）、愛妾は尚ほ在り（その婢妾は猶その家に在りて官に没せず、もしくは他家に流落せず）。而るに將軍は沸鼎之中に魚游し、飛幕之上に燕巢す（左傳に、吳の李札は孫林父に謂って曰く、夫子の此に居るや、猶燕の幕上に巢くうが如しと。蓋し至って危うきなり）。亦た惑わず乎！想うに早く良圖を勵まし、自ら多福を求めるべし。」

庚寅（26-2+1=2 5 日），伯之は壽陽の梁城より集八千を擁して來降し、魏人は其の子の虎牙を殺す。詔して復た伯之を以て西豫州刺史と為す。未だ任に之かず、復た以て通直散騎常侍と為す（邊鎮に置かないのは叛乱を懼れる）。之久しく、（8-315p）家に於いて卒す。

● 「鹽池の禁の中止」 初め、魏の御史中尉の甄琛は表稱す、

「《周禮》に、山林川澤には虞、衡之官（山虞は山林の政令、林衡は林麓の禁令、川衡は川澤の禁令、澤虞は国澤の政令を掌る）有り、之が厲禁を為す、蓋し之を取るに時を以てす、戕賊（傷つけ殺す）せ使めず而して已む、故に有司を置くと雖も、實は民の為に之を守る也。夫れ一家之長は、必ず子孫を惠養し、天下之君は、必ず兆民を惠養す、未だ人の父母と為りて而して其の醢醢を吝み、富は群生を有ち而して其の一物を権（専売）する者有らざる也。今縣官は河東の鹽池を鄣護（保護）し而して其の利を收めるは、是れ専ら口腹に奉じ而して四體に及ばざる也。蓋し天子は富は四海を有ち、何の貧しきを患えん！乞う鹽禁を弛め、民と之を共にせん。」

録尚書事の**魏**（彭城王）、尚書の**邢巒**は奏し、以為く、

「**琛**之陳べる所は、坐談は則ち理高く、之を行えば則ち事闕く。竊に惟うに古之善く民を治める者は、必ず汚隆（盛衰）は時に随い、豊儉は事に稱^{かな}い、役養は消息し以て其の性命を成す。若し其の自ら生ずるに任せ、其の飲啄（飲み食い）するに随えば、乃ち是れ萬物を芻狗（快気祈願や厄払いのために神前に供えるわら細工の犬、老子曰く、天地は仁ならず、万物を以て芻狗と為す）す、何ぞ君を以て為すや！是の故に聖人は山澤之貨を斂め、以て**田疇**（漢末の政治家）之賦を寛める（田疇の什一税は国用に足らず、故に山澤をおさめ關市に税してこれを助ける）。關市之税を收め、以て什一之儲を助ける。此に取りて彼に與えるは、皆な身の為にするに非ず、所謂天地之産に資り、天地之民に恵む也。今鹽池之禁は、日々に為ること已に久しく、積みて而も之を散じ、以て軍國を濟^{よく}い、専ら太官之膳羞に供し、後宮之服玩を給するの為に非ず。既に利は己に在らざれば、則ち彼我は一也。然れども鹽を禁じてより以來、有司は多く出納之間を慢にし、或は法の如くならず。是れ細民をして嗟怨し、負販をして輕々しく議せ使む、此れ乃ち之を用いる者は方無く、之を作る者は失有るに非ざる也。一旦之を罷めれば、恐らくは本旨に乖^{そむ}かん。一たび行い一たび改む、法は弈棋の若く（定法無し）ならん、理要を參論するに、宜しく舊式の如くなるべし。」

魏主は卒に**琛**の議に従い、**夏，四月**，乙未（31-31+1=1日）、鹽池の禁を罷む。

● 〔中山王の英に梁を防がしむ〕 庚戌（46-31+1=16日）、魏は中山王の**英**を以て征南將軍、都督揚、徐二州諸軍事と為し、衆十餘萬を帥いて以て梁の軍を拒がしめ、諸節度を指授し、至る所便宜を以て事に從わせしむ。

■ ●〔王茂は魏の楊大眼に破られる〕 江州刺史の**王茂**は兵數萬を將いて魏の荊州を侵し、魏の邊民及び諸蠻を誘いて更めて宛州（魏の荊州）を立て、其の署する所の宛州刺史の**雷豹狼**等を遣わして襲いて魏の河南城（南陽の棘陽県、河南省汝陽道新野県、現・南陽市新野県）を取らしむ。魏は平南將軍の**楊大眼**を遣わして諸軍を都督せしめて**茂**を撃ち、辛酉（57-31+1=27日）、**茂**は戦いて敗れ、二千餘人を失亡す。**大眼**は進みて河南城を攻め、**茂**は逃げ還る。**大眼**は追いて漢水に至り、攻めて五城を抜く。

●魏の徵虜將軍の**宇文福**は司州を寇し、千餘口を俘として而して去る。

■ 〔張惠紹は魏の徐州を侵す〕 **五月**，辛未（7-1+1=7日）、太子の右衛率の**張惠紹**等は魏の徐州を侵し、宿預（晉の安帝は宿預県を立て、淮陽郡に属す。魏の高祖は以て南徐州の治所と為す。故城は江蘇省徐海道宿遷県の東南、現・宿遷市宿豫区）を抜き、(8-316p) 城主の**馬成龍**を執る。乙亥（11-1+1=11日）、北徐州（南徐州は京口に治す、北徐州は鐘離に治す）刺史の**昌義之**は梁城を抜く。

■ 〔韋睿は小峴を攻める〕 豫州刺史の**韋睿**は長史の**王超**等を遣わして小峴を攻め、未だ抜かず。**睿**は行きて柵を圍み、魏は數百人を出して門外に陳じ、**睿**は之を撃たんと欲し、諸將は皆な曰く、

「向者に輕く來たり、未だ戦備有らず、徐^{おもむ}ろに還りて甲を授け、乃ち進む可き耳。」

睿は曰く、

「然らず。魏の城中二千餘人、以て固く守るに足る、今故無くして人を外に出す、必ず其の驍勇なる者也。苟くも能く之を挫けば、其の城自ら抜かん。」

衆は猶ほ遲疑す、**睿**は其の節を指さして曰く、

「朝廷は此を授く、以て飾りと為すに非ず、**韋睿**の法は犯す可からざる也！」

遂に進みて之を撃ち、士は皆な殊死して戦い、魏兵は敗走し、因りて急に之を攻め、中宿に而して抜き、遂に合肥に至る。

■[合肥攻防戦] 是より先、右軍司馬の**胡景略**等は合肥を攻め、久しく未だ下らず、**睿**は山川を按じ、夜、衆を帥いて肥水を堰き、之^{しばら}頃くして、堰は成り水は通じ、舟艦は繼ぎて至る。魏は東、西の小城を築き合肥を夾み、**睿**は先ず二城を攻め、魏將の**楊靈胤**は衆五萬を帥いて奄至す。衆は敵せざるを懼れ、奏して兵を益すを請い、**睿**は笑いて曰く、

「賊は城下に至り、方に兵を益すを求めるとも、將に何の及ぶ所あらん！且つ吾は兵を益すを求め、彼も亦た兵を益さん。兵は奇を用いるを貴ぶ、豈に衆に在らん也！」

遂に**靈胤**を撃ち、之を破る。**睿**は軍主の**王懷靜**をして城を岸に築き以て堰を守らせめ、魏は攻めて之を抜き、城中の千餘人は皆な没す。魏人は勝ちに乗りて堤の下に至り、兵の勢は甚だ盛んにして、諸將は退きて巢湖に還らんと欲し、或は三叉（巢湖の水はここにおいて三叉に分かれ、故に名付ける。退きて之に保する時は船に入るに利あり、故に衆はこれを欲す）を保たんと欲し、**睿**は怒りて曰く、

「寧んぞ此れ有らん邪！」

命じて傘扇麾幢を取り、之を堤下に樹て、動志無しを示す。魏人は來たりて堤を鑿ち、**睿**は親ら之と争い、魏兵は卻き、因りて壘を堤に築き以て自ら固める。**睿**は門艦を起し、高さは合肥城と等しく、四面之に臨み、城中の人は皆な哭し、守將の**杜元倫**（杜元倫×）は城に登りて督戦するも、弩に中たりて死す。辛巳（17-1+1=17日）、城は潰え、俘斬は萬餘級、牛馬（統は牛羊）を獲ること萬を以て數える。

■[睿は輿に乗りて采配絶妙] **睿**の體は素より羸く、未だ嘗た馬に跨らず、戦う毎に、常に板輿に乗りて將士を督厲し、勇氣は敵無し。晝は賓旅に接し、夜半起き、軍書を算し、燈を張りて曙に達す。其の衆を撫扞（統は撫循）すること、常に及ばざるが如し、故に投募之士は争いて之に歸す。至る所頓捨するに、館宇藩牆は、皆な準繩に應ず。諸軍は進みて東陵に至り、詔有り（この詔は必ず洛口の帥が潰ゆるの後に在らん、史は睿の事を書くに因りて終にこれを言う）て師を班す。魏の城を去ること既に近く、諸將は其の迫躡を恐れ、**睿**は悉く輜重を遣りて前に居らしめ、身は小輿に乗りて後に殿し、魏人は**睿**の威名に服し、之を望みて敢えて逼らず、全軍は而して還る。是に於いて豫州を遷して合肥に治す。

●壬午（18-1+1=18日）、魏は尚書の**元遙**を遣わして南して梁兵を拒ましむ。

●癸未（19-1+1=19日）、魏は征西將軍の**於勁**を遣わして秦、隴の諸軍を節度せしむ。

■丁亥（23-1+1=23日）、廬江太守の聞喜の**裴邃**は魏の羊石城に克ち、庚寅（26-1+1=26日）、又た霍丘（安徽省淮泗道霍丘県、現・六安市霍邱県）城に克つ。

■六月、庚子（36-30+1=7日）、（8-317p）青、冀二州刺史の**桓和**は朐山城に克つ。

●乙巳（41-30+1=12日）、魏の安西將軍の**元麗**は**王濬智**（統は王法智）を撃ち、之を破り、斬首は六千級。

■[張惠紹は彭城攻略失敗] **張惠紹**は假徐州刺史の**宋黑**と水陸俱に進み、彭城に趣き、高塚戍（水經注に彭城の岡孝山陰に楚の元王の冢有り、高さ十許丈。魏はここに戍を立てたと思われる）を圍み、魏の武衛將軍の**奚康生**は兵を將いて之を救い、丁未（43-30+1=14日）、**惠紹**の兵は利あらず、**黑**は戦死す。

■太子の**統**は生まれて五歳、能く遍く《五經》を誦す。庚戌（46-30+1=17日）、始めて禁中より山でて東宮に居る。

●丁巳（53-30+1=24日）、魏は度支尚書の**邢巒**を以て東討諸軍事を都督せしむ。

●[魏の源懷の卒] 魏の驃騎大將軍の馮翊の惠公の**源懷**は卒す。**懷**の性は寛簡にして、煩碎を喜ばず、常に曰く、

「貴人爲るは當に綱維を擧げるべし、何ぞ必ずしも事事詳細ならん！譬えば屋を爲るが如し、但だ外望は高顯にして、楹棟（大黒柱、柱石）は平正に、基壁完牢なれば、足る矣。斧斤は平らかならず、斫削密から

ざれば、屋之病に非ざる也。」

■ 「桓和は固城を抜く」 秋，七月，丙寅（2-0+1=3日），桓和は魏の兗州を撃ち，固城（抱犢の固城か、抱犢山は蘭陵の界にあり、山東省済寧道嶧県、現・棗荘市嶧城区）を抜く。

● 「秦州の呂苟兒は元麗に降る」 呂苟兒は衆十餘萬を率いて孤山に屯し，秦州を圍逼し，元麗は進撃し，大いに之を破る。行秦州事の李韶は孤山（上邽近辺のはず、魏の秦州は上邽に治す、天水・略陽・漢陽郡を領す、甘肅省渭川道天水県、現・天水市秦州区）を掩撃し，其の父母妻子を獲たり，庚辰（16-0+1=17日），苟兒は其の徒を帥い麗に詣りて降る。

● 「楊椿は陳瞻を討ち秦涇州平定」 兼太僕卿の楊椿は別に陳瞻を討ち，瞻は險に據りて拒み守る。諸將の或は兵を山蹊に伏し，其の出入を斷ち，糧の盡きるを待ち而して之を攻めるを請い，或は木を斬り山を焚き，然る後に進みて討たんと欲す。椿は曰く、

「皆な計に非ざる也。官軍之至りしより，向う所輒ち克つ，賊が深く竄^{のが}るる所以は，正に死を避ける耳。今諸軍を約勒し，更に侵掠する勿からしめば，賊は必ず我が險を見て前まずと謂わん。其の備え無きを待ち，然る後に奮撃すれば，一舉に平らげるも可也。」

乃ち止まりて屯して進まず。賊は果たして出でて抄掠し，椿は復た馬畜を以て之に餌とし，討逐を加えず。之久しく，陰^{ひそか}に精卒^{えら}を簡び，枚^{かく}を銜んで夜之を襲い，瞻を斬り，首を傳える。秦、涇二州は皆な平らぐ。

【蕭宏は怯懦で軍崩壊】

■ 「王伯敖は陰陵で破れる」 戊子（24-0+1=25日），徐州刺史の王伯敖は魏の中山王の英と陰陵（漢の九江郡の県、晉の淮難郡、梁の北譙郡は陰陵城に治す。安徽省淮泗道定遠県西北、現・滁州市定遠県）に戦い，伯敖の兵は敗れ，五千餘人を失亡す。

●■ 「魏は大動員で南進」 己丑（25-0+1=26日），魏は定、冀、瀛、相、並、肆の六州十萬人を發して以て南行之兵を益す。上は將軍の角念を遣わして兵一萬を將して蒙山（南青州東安郡新秦県東南、山東省済寧道費県西北。古の所謂東蒙なり。固城・孤山と魏の兗州の東界に近し、故に梁は兵を連れて之により兗州の民を集める。現・臨沂市費県）に屯し，兗州之民を招納せしめ，降る者は甚だ衆し。是の時，將軍の蕭及は固城に屯し，桓和は孤山に屯す。魏の邢巒は統軍の樊魯を遣わして和を攻めしめ，別將の元恆をして攻及を攻めしめ，統軍の畢祖朽をして念を攻めしむ。（八月）壬寅（38-29+1=10日），魯は大いに和を孤山（魏政志に蘭陵郡蘭陵県に石孤山あり、昌慮県に孤山あり）に破り，恆は固城を抜き，（8-318p）祖朽（祖配×）は念を撃ち，之を走らす。

● 「魏は宿預・淮陽を執る」 己酉（45-29+1=17日），魏は平南將軍の安樂王の詮に詔して後發の諸軍を督して淮南に赴かしむ。詮は，長樂（133 卷宋の蒼梧王元徽三年にあり）之子也。將軍の藍懷恭は魏の邢巒と睢口（睢水の泗水に入る口、江蘇省徐海道旧徐州にあり、現・宿遷市東南十里）に戦い，懷恭は敗績し，巒は進みて宿預を圍む。懷恭は復た清南（清水の南）に於いて築城し，巒は平南將軍の楊大眼と合して之を攻め，九月，癸酉（9+60-59+1=11日），之を抜き，懷恭を斬り，殺獲は萬計。張惠紹は宿預を棄て（胡三省曰く、此後の「張惠紹は洛口敗れしを聞き兵を引いて退く」と元は一事なるのみと），蕭曷は淮陽を棄て，遁れ還る。

■ 「蕭宏の怯懦を敵味方議論」 臨川王の宏は帝の弟を以て兵を將い，器械は精新にして，軍容は甚だ盛なり，北人は以為えらく百數十年未だ之れ有らざる所なり。軍は洛口（洛谷水が漢水に入る口、陝西省漢中道洋県、現・漢中市洋県）に次し，前軍は梁城に克ち（昌義之が梁城に克つをいう），諸將は勝ちに乗りて深く入らんと欲し，宏は性は懦怯なり，部分は方に乖く。魏は邢巒に詔して兵を引いて淮を渡り，中山王の英と合して梁城を

攻めしむ。宏は之を聞き、懼れ、諸將を召して師を旋^{かえ}すを議す。呂僧珍は曰く、
「難きを知り而して退くは、亦た善しからず乎！」

宏は曰く、
「我も亦た以て然りと為す。」

柳惔は曰く、
「我が大衆の臨む所より、何の城か服さざるや、何ぞ難きと謂う乎！」

裴邃は曰く、
「是の行也、固より敵を是れ求める、何ぞ難きを之れ避けん！」

馬仙玘（続は馬仙琕）は曰く、
「王は安くにか亡國之言を得るや！天子は境内を掃いて以て王に屬す、前みて死一尺有り、卻きて生一寸無し！」

昌義之は怒り、鬚髮は盡く磔り（張り開く）、曰く、
「呂僧珍は斬る可き也！豈に百萬之師有りて出でて未だ敵に逢わず、風を望みて遽^{にわか}に退くや！何の面（而
×）目ありてか聖主に見えるを得ん乎！」

朱僧勇、胡辛生は劍を抜き而して退（南史宏傳には起に作る）き、曰く、
「退かんと欲すれば自ら退け、下官は當に前み向いて死を取るべし。」

議者は罷めて出で、僧珍は諸將に謝して曰く、
「殿下は昨來風動き（宏の心風発動する）、意は軍に在らず、深く恐る大いに沮喪を致さんことを、故に師を全く而して返さんことを欲する耳。」

宏は敢て遽^{にわか}に群議に違わず、軍を停めて前まず。魏人は其の武ならざるを知り、遺るに巾幘（女性が飾り髪を覆う物、女々しさの喩え）を以てし、且つ之を歌いて曰く、

「蕭娘と呂姥とを畏れず（蕭宏と呂僧珍の怯懦なる事婦女子の如し）、但だ合肥に韋虎有るを畏る。」

虎は、韋睿を謂う也。僧珍は歎じて曰く、

「始興（始興王憺）、吳平（吳平侯曷）をして帥を為ら使め而して之を佐^{たす}ければ、豈に敵人の侮る所と為ることはくの如き有らん乎！」

裴邃を遣わし軍を分けて壽陽を取らしめ、大衆は洛口に停めんと欲す、宏は固執して聽かず、軍中に令して曰く、

「人馬の前行する者有れば斬らん！」

是に於いて將士人々は憤怒を懷く。魏の奚康生は馳せて楊大眼を遣わして中山王の英に謂って曰く、
「梁人は梁城に克つより已後、久しく軍を進めず、其の勢いは見る可し、必ず我を畏れる也。王が若し進みて洛水に據れば、彼は自ら奔敗せん。」

英は曰く、

「蕭臨川は駭^{おろ}かなりと雖も、其の下に良將の韋、裴之屬有り、（8-319p）未だ輕んじる可からざる也。宜しく且く形勢を觀て、與に鋒を交える勿かれ。」

■ 〔張惠紹は下邳の降人を諭す〕 張惠紹の號令は嚴明にして、至る所獨り克ち、下邳に軍す（胡三省曰く前
に宿預を棄てると書くに、宿預は下邳の東南百餘里に在り、下邳に軍すとは宿預放棄前の事。李延壽は之を以て臨川王宏の傳に載せる。
資治通鑑はまた再度載せると）、下邳の人は降らんと欲する者多く、惠紹は之を諭して曰く、

「我が若し城を得れば、諸卿は皆な是れ國人（王民）なり、若し克つ能わざれば、徒^{いたず}らに諸卿をして郷里

を失わしめ、朝廷の民を弔う之意に非ざる也。今且く安堵して業に復すべし、^{みだり}妄に自ら辛苦する勿かれ。」

降人は鹹な悦ぶ。

■**「宏は暴風雨で逃散、軍崩壊」**己丑（25+60-59+1=27日）、夜、洛口は暴風雨し、軍中は驚き、臨川王の宏は數騎と逃げ去る。將士は宏を求めて得ず、皆な散りて歸り、甲を棄て戈を投げ、水陸に填滿し、病者及び羸老を捐棄し、死者は五萬人に近し。宏は小船に乗りて江を濟り、夜白石壘に至り、城門を叩いて入るを求める。臨汝侯の淵猷は城に登りて謂って曰く、

「百萬之師は、一朝にして鳥散し、國之存亡は、未だ知る可からざる也。恐らくは奸人は間に乗りて變を為さん、城は夜開く可からず。」

宏は以て對える無し、乃ち食を糲^{つろ}して之を饋る。淵猷は、淵藻之弟。時に昌義之は梁城に軍し、洛口の敗れるを聞き、張惠紹と皆な兵を引いて退く。

●■**「魏は馬頭の糧米を接収」**魏主は中山王の英に詔して勝ちに乗りて東南を平蕩せしめ、北^にげるを遂いて馬頭（鐘離の西にあり）に至り、攻めて之を抜き、城中の糧儲は、魏は悉く之を遷して北に歸る。議者は鹹な曰く、

「魏は米を運びて北に歸る、當に復た南に向かわず。」

上は曰く、

「然らず、此れ必ず兵を進めんと欲し、詐計を為す耳。」

乃ち命じて鐘離城を修めしめ、昌義之に敕して戰守之備えを為さしむ。

●**冬、十月**、英は進みて鐘離を圍み、魏主は邢^な轡に詔して兵を引いて之に會さしむ。轡は上表し、以為く、「南軍は野戰に敵非ずと雖も、而も城守は餘り有り、今銳を盡して鐘離を攻めれば、之を得るとも則ち利する所^{いくば}幾くも無く、得ざれば則ち虧損は甚だ大なり。且つ淮外に介在し、借使手を束ねて順に歸すとも、猶ほ恐らく糧無く守り難し、況んや士卒を殺し以て之を攻めるを乎！又た、征南の士卒は戎に従うこと二時、疲弊死傷するは、問わずして知る可し。勝ちに乗る之資有ると雖も、懼らくは用いる可き之力無からん。臣の愚見の若きは、謂うに宜しく舊戍を修復し、諸州を撫循し、以て後舉を俟つべし、江東之釁は、其の無きを患えず。」

詔して曰く、

「淮を濟りて犄角するは、事は前敕の如し、何ぞ猶爾（爾は助詞）ほ盤桓（進まざる貌）し、方に此の請い有る容げんや！速かに進軍す可し！」

轡は又た表し、以為く、

「今中山は進みて鐘離に軍するは、實に未だ解さざる所なり。若し得失之計（損得計算）を為し、萬全（^{續は}萬金）を顧みず、直ちに廣陵を襲い、其の不備に出でれば、或は未だ知る可からず（^{勝つ可能性あり}）。（8-320p）若し正に八十日の糧（英は八十日糧で取ろうとした）を以て鐘離城を取らんと欲する者、臣は未だ之を前聞せざる也。彼は城を堅くして自ら守る。人と戦わざれば、城塹は水深く、填塞（^{ちんさく}充ち塞がる）す可きに非ず、空しく坐して春に至れば、士卒は自ら弊れん。若し臣を遣わして彼に赴かしむとも、何に従りてか糧を致さん！夏來たる之兵は、冬服を繼^{もた}らさず、脱し冰雪に遇えば、何の方か濟を取らん！臣は寧ろ怯懦にして進まざる之責を荷なわん、敗損し空しく行く之罪を受けず。鐘離の天險は、朝貴（^{つがき}朝廷の貴族臣下）の具にする所なり、若し内應有れば、則ち知らざる所なり。如し其れ無ければ也、必ず克狀（^{くつぱう}克つべきの狀）無し。若

し臣の言を信ずれば、願わくは臣に停まることを賜え、若し臣行くを憚り還るを求めると謂えば、臣が領する所の兵は盡く中山に付し、其の處分に任せ、臣は止だ單騎を以て之に隨いて東西せん。臣は屢々將と為るを更、頗る可否を知る、臣は既に難しと謂う、何ぞ強いて遣わす容けんや！」

乃ち**轡**を召して還らしめ、更に鎮東將軍の**蕭寶寅**（齊の王族、北魏に亡命中）に命じて**英**と同じく鐘離を圍ましむ。

● **〔邢轡は美女を元暉に賂〕**侍中の**盧昶**は素より**轡**を惡み、侍中、領右衛將軍の**元暉**と共に之を譖り、御史中尉の**崔亮**をして**轡**が、

「漢中に在りて人を掠めて奴婢と為す」（**轡**傳に曰く、**轡**始め漢中に至るや、豪右を接するに禮を以てしす、衆を撫するに恵を以てす、歳餘の後、頗る其の去就に因り、百姓を誅滅し、籍して奴婢と為す者二百餘人と。）

と彈ぜ使む。**轡**は漢中に得たる所の美女を以て**暉**に賂し、**暉**は**魏主**に言つて曰く、

「**轡**は新たに大功有り、當に赦前（この年正月に皇子生まれて恩赦）の小事を以て之を案ずべからず。」

魏主は以て然りと為し、遂に問わず。

● **〔亮官に相場あり〕****暉**は**盧昶**と皆な**魏主**に寵有り、而して貪縱なり、時の人は之を謂「餓虎將軍」、「饑鷹侍中」と謂う。**暉**は尋いで吏部尚書に遷り、官を用いること皆な定價有り、大郡は二千匹、次郡、下郡は其の半ばを遞減し、餘官は各々等差有り、選者は之を「市曹」（遷曹にして貨賂して市を為すを以ていう）と謂う。

■ **〔義陽包圍兵の遁走〕**丁酉（33-28+1=6日）、梁兵の義陽を圍む者は夜遁げ（洛口の師潰えるを聞きて遁走）、**魏**の郢州刺史の**婁悅**は追撃して、之を破る。

● **〔柔然の衰退凋落〕**柔然の庫者可汗は卒し、子の**伏圖**は立ち、**佗汗**（中国での緒の意味）可汗と號し、改元して始平とす。戊申（44-28+1=17日）、**佗汗**は使者の**紇奚勿六跋**を遣わして**魏**に如きて和を請わしむ。

魏主は其の使に報ぜず、**勿六跋**に謂つて曰く、

「蠕蠕の遠祖は**社命**（108 卷晉の孝武帝太元 19 年にあり）、乃ち**魏**之叛臣なり、往者に包容し（136 卷齊の武帝永明五年にあり）、暫く通使を聽す。今蠕蠕は衰微し、疇昔に及ばず、大**魏**之徳は、方に周、漢よりも隆んなり、正に江南未だ平がざるを以て、少しく北略を寬める、通和之事は、未だ相い許す容からず。若し藩禮を修め、款誠（忠実）昭著（顯著）なる者は、當に爾に孤かざる也。」

● **〔魏の綱紀肅正〕****魏**の京兆王の**愉**、廣平王の**懷**は國臣は多く驕縱にして、公に屬請を行い、**魏主**は中尉**崔亮**に詔して之を究治せしめ、坐して死する者は三十餘人、其の死せざる者は悉く除名して民と為す。

（8-321p）惟だ廣平の右常侍（晉以来王国に師友、文学各々一人、左右常侍あり）の**楊昱**、文學の**崔楷**は忠諫なるを以て免かるるを獲る。**昱**は、**椿**（137 卷齊の武帝永明八年）之子也。

■ **〔曹景宗の鐘離救援失敗〕**十一月，乙丑（1+60-58+1=4日）、大赦す。右衛將軍の**曹景宗**に詔して諸軍二十萬を都督して鐘離を救わしむ。**上**は**景宗**に敕して道人洲（邵陽洲の東）に頓し、衆軍の齊しく集まるを俟ちて俱に進ましむ。**景宗**は固く啟して先ず邵陽洲尾に據るを求め、**上**は許さず。**景宗**は其の功を専らにせんと欲し、詔に違えて而して進み、暴風の猝に起こるに値い、頗る溺れる者有り、復た還りて先の頓（道人洲）を守る。**上**は之を聞き、曰く、

「**景宗**は進まず、蓋し天意也。若し孤軍獨り往けば、城は時に立たず、必ず狼狽を致さん。今賊破るは必ずなり矣。」

● **〔魏は群獠を慰撫〕**初め、漢の歸義侯の**勢**之末、群獠（西南地方に住む少数民族）は始めて出ず（97 卷晉の孝宗永和二年にあり）、北は漢中より、南は邛笮（邛都・笮都、四川西昌・漢源一帯）に至るまで、山谷に佈滿す。**勢**は既に亡びる。蜀民は多く東に徙り、山谷の空地は皆な獠の據る所と為る。其の郡縣に近く華民と雜居する者

は、頗る租賦を輸すれども、遠く深山に在る者は、郡縣は制する能わず。梁、益二州は歲ごとに獠を伐ち以て自ら潤い、公私は之を利とする。邢巒の梁州と為るに及び、獠の近き者は皆な安堵して業を楽しみ、遠き者は敢えて寇を為さず。巒は既に罷め去るや、魏は羊祉を以て梁州刺史と為し、傅豎眼をして益州（去年は晉壽を得て益州を置く）刺史と為す。祉の性は酷虐にして、物情（人望）を得ず。獠王の趙清荊は梁兵を引いて州境に入りて寇を為し、祉は兵を遣わして撃ちて之を破る。豎眼は恩を施し信を布し、大いに獠の和を得る。

■十二月，癸卯（39-28+1=1 2 日），都亭靖侯の謝朓は卒す。

●魏人は樂を議し（三年に魏は樂を論ぜしむ、前卷にあり），久しく決せず。

高祖武皇帝二天監六年（丁亥，507年）

●春，正月，公孫崇は衛軍將軍、尚書右僕射の高肇に委ねて其の事を監ぜしめんと請う。魏主は肇が學ばざるを知り，太常卿の劉芳に詔して之を佐けしむ。

【梁は鐘離攻防戦で守り抜く】

●[中山王の英の鐘離猛攻] 魏の中山王の英は平東將軍の楊大眼等衆數十萬と鐘離を攻める。鐘離城は北に淮水を阻とし，魏人は邵陽洲の兩岸に於いて橋を為り，柵を樹てるに數百步，淮に跨りて道を通じる。英は南岸に據りて城を攻め，大眼は北岸に據りて城を立て，以て糧運を通じる。城中の衆は才に三千人，昌義之は將士を督帥し，方に隨いて抗禦す。魏人は車を以て土を載せ塹を填し，其の衆をして土を負いて之に隨わしめ，嚴騎は蹙其の後に蹙る。人の未だ回るに及ばざる者有り，因りて土を以て之に迄る。俄に而して塹は滿ち，冲車の撞く所，城土は輒ち頽れ，義之は泥を用いて之を補い，冲車は入ると雖も而して壞す能わず。魏人は晝夜苦攻し，番を分けて相い代わり，墜に而して復た上り，退く者有る莫し。一日に戦うこと數十合，前後に殺傷するは萬計り，（8-322p）魏人の死者は城と平らかなり。

●[英は撤退を拒否] 二月，魏主は英を召して還らしめ，英は表稱す、

「臣の志は逋寇を殄くすにあり，而るに月初已來，霖雨は止まず，若し三月晴霽すれば，城は必ず克つ可し，願わくは少しく寛假を賜わらん。」

魏主は復た詔を賜いて曰く、

「彼の土は蒸濕にして，宜しく久しく淹まるべき無し。勢いは必ず取るは，乃ち將軍之深計と雖も，兵は久しく力殆きは，亦た朝廷之憂うる所也。」

英は猶ほ必ず克つと表稱し（義陽の克ちに奢れるなりと），魏主は歩兵校尉の范紹を遣わして英に詣りて攻取の形勢を議せしむ。紹は鐘離の城堅きを見，英に引いて還るを勧め，英は從わず。

■[韋睿の援軍で城中勇氣百倍] 上は豫州刺史の韋睿に命じて兵を將いて鐘離を救い，曹景宗の節度を受けしむ。睿は合肥より直道を取り，陰陵の大澤由り行き，潤谷（谷）に值えば，輒ち飛橋以て師を濟す。人は魏兵の盛んなるを畏れ，多く睿に緩行を勧める。睿は曰く、

「鐘離は今穴を鑿り而して處り，戸を負い而して汲む，車馳せ卒奔るも，猶ほ其の後れんことを恐れる，而るに況んや緩めん乎！魏人は已に吾が腹中に墮つ，卿曹は憂うる勿かれ也。」

旬日にして邵陽に至る。上は豫め曹景宗に敕して曰く、

「韋睿は，卿之郷望（曹景宗は新野の人、韋睿は京兆の著名な姓にして襄陽に居る）なり，宜しく善く之を敬うべし！」

景宗は睿を見、禮すること甚だ謹しむ。上は之を聞き、曰く、

「二將和すれば、師は必ず濟らん矣。」

景宗は睿と進みて邵陽洲に頓し、睿は景宗の營前二十里に於いて夜長塹を掘り、鹿角を樹て、洲を截りて城を為り、城を去ること百餘歩なり。南梁太守の馮道根は、能く馬を走らせ地を歩み、馬足を計りて以て功を賦し（功は力、賦は布。即ち給与。一夫の力を査定して仕事を割り振る）、曉に^{およ}比び而して營立つ。魏の中山王の英は大いに驚き、杖を以て地を撃つて曰く、

「是れ何ぞ神ならん也！」

景宗等は器甲は精新にして、軍容は甚だ盛んなり、魏人は之を望んで氣を奪われる。景宗は城中の危ぶみ懼れんことを慮り、軍士の言文達等を募りて水底を潛行し、敕を繼いで城に入らしめ、城中は始めて外援有るを知り、勇氣は百倍す。

●〔楊大眼の格闘剛なり〕楊大眼の勇は軍中に冠たり、萬餘騎を將して來たりて戦い、向かう所皆な靡く。睿は車を結びて陳を為り、大眼は騎を聚めて之を圍み、睿は強弩二千を以て一時に俱に發し、甲を洞き中を穿ちて、殺傷すること甚だ衆し。矢は大眼の右臂を貫き、大眼は退きて走る。明くる旦、英は自ら衆を帥いて來戦し、睿は素木の輿に乗りて、白角の如意を執りて以て軍を^{さしまね}磨く。一日に數合、英は乃ち退く。魏師は復た夜來たりて城を攻め、飛矢は雨集す。睿の子の黯は城を下りて以て箭を避けるを請う、睿は許さず。軍中は驚き、睿は城上に於いて聲を厲まして之を呵す、乃ち定まる。牧人の淮を過ぎ北して芻稿（稿税。秦漢の田賦の一種）を伐る者は、皆な楊大眼の略する所と為り、曹景宗は勇敢士千餘人を募り、大眼の城南數里に於いて壘を築き、大眼は來攻し、景宗は撃ちて之を卻ける。壘は成り、別將の趙草をして之を守ら使め、抄掠する者有れば、皆な草の獲る所と為り、(8-323p) 是の後始めて芻牧を^{はな}縦つを得たり。

■〔曹景宗は魏軍を撃退〕上は景宗等に命じて豫め高艦を装し、魏橋と等しから使め、火攻之計を為す。景宗と睿とをして各々一橋を攻め令める。睿は其の南（元英の陣）を攻め、景宗は其の北（楊大眼の陣）を攻める。三月、淮水は瀑漲すること六七尺なり。睿は馮道根と廬江太守の裴邃、秦郡（晉の武帝は扶風を分けて秦国とす。中原乱れその民は南遷して堂邑に寄居す。惠帝永興元年に臨淮・淮陵を以て堂邑郡を立て、安帝は秦郡とす、江蘇省金陵道六合県、現・南京市六合区）太守の李文釗等をして門艦に乗りて競い發して、魏の洲上の軍を撃た使め盡くし殪す。別に小船を以て草を載せ、之に灌ぐに膏を以てし、従い而して其の橋を焚く。風は怒り火は盛んにして、煙塵は晦冥なり、敢死之士は、柵を抜き橋を斫り、水は又た漂疾（急流）し、倏忽（たちまち）之間に、橋柵は俱に盡きる。道根等は皆な身自ら搏戦し、軍人は勇を奮い、呼聲は天地を動かし、一の百に當たらざる無く、魏軍は大いに潰ゆ。英は橋の絶えるを見、身を脱し城を棄てて走り、大眼も亦た營を焼きて去り、諸壘は相い次いで土崩し、悉く其の器甲を棄て争いて水に投じて、死者は十餘萬、斬首も亦た之の如し。睿は遣わして昌義之に報ぜしめ、義之は悲喜し、答語に暇あらず、但だ叫びて曰く、

「更生（蘇生）！更生！」

諸軍は北げるを逐いて濊水（睢州穀陽郡連城県にあり、江蘇省徐海道碭山県、現・宿州市碭山県）の上に至り、英は單騎にして梁城に入り、緣淮の百餘里は、屍は相い枕藉し、五萬人を生きて擒にし、其の資糧、器械を收めて山積し、牛馬驢騾は勝げて計える可からず。

■〔義之は官賭を設ける〕義之は景宗及び睿を徳とし、二人を請いて共に會し、錢二十萬を設け、之を官賭（樗蒲賭博は私のみで公庭に設けず。公に賭ける、博して以て財を取るを賭けという）す。景宗は擲げて雉を得る。睿は徐ろに擲げて盧を得、遽に一子を取りて之を反し、曰く、

「異事（怪事）！」

遂に塞と作す。景宗は群帥と先を争いて捷ちを告げ、睿は獨り後に居り、世は尤も此を以て之を賢とす。詔して景宗、睿に爵邑を増し、義之等は賞を受けること各々差有り。

■夏，四月，己酉（45-26+1=20日），江州刺史の王茂を以て尚書右僕射と為し，安成王の秀（武帝の弟）を江州刺史と為す。秀は將に發せんとし，主者は堅船を求め以て齋舫（船を以て齋庫の物を載せる）と為す，秀は曰く、

「吾は豈に財を愛し而して士を愛せざらん乎！」

乃ち堅き者を以て參佐に給し，下れる者を以て齋物を載せる。既に而して風に遭い，齋舫は遂に破る。

■〔梁の新人事〕丁巳（53-26+1=28日），臨川王の宏を以て驃騎將軍、開府儀同三司と為し，建安王の偉を揚州刺史と為し，右光祿大夫の沈約を尚書左僕射と為し，左僕射の王瑩を中軍將軍と為す。（8-324p）

■●六月，丙午（42-25+1=18日），馮翊等の七郡は叛し，魏に降る。

■秋，七月，丁亥（23+60-54+1=30日），尚書右僕射の王茂を以て中軍將軍と為す。

■八月，戊子（24-24+1=1日），大赦す。

●〔元英と蕭寶寅の敗戦責任を問う〕魏の有司は奏す、

「中山王の英は經算は圖を失い，齊王の蕭寶寅等は橋を守るに固からず，皆な處するに極法を以てすべし。」

己亥（35-24+1=12日），英、寶寅に詔して死を免じ，除名して民と為し，楊大眼は營州（魏の世祖眞君五年に置き和龍に治す、現・朝陽市、昌寧・建徳・遼東・樂浪・冀陽郡を領す）に従して兵と為す。中護軍の李崇を以て征南將軍、揚州刺史と為す。崇は多く産業を事とす。征南長史の狄道の辛琛は屢々諫めて従わず，遂に相い糾舉す。詔して並びて問わず。崇は因りて置酒して琛に謂って曰く、

「長史は後に必ず刺史と為らん，但だ上佐の何如なる人を得るか知らざる耳。」

琛は曰く、

「若し萬一叨に^{みだり}忝^{かたじけな}くすれば，一の方正なる長史を得，朝夕過ちを聞かん，是れ願う所也。」

崇は慚色有り。

●〔魏の新体制〕九月，己亥（35+60-53+1=43日、曆不一致），魏は司空の高陽王の雍を以て太尉と為し，尚書令の廣陽王の嘉を司空と為す。甲子（0+60-53+1=8日），魏は斜谷（陝西省終南山の谷、郿県の西南、長さ420里、西口を褒、東口を斜という）の舊道（漢の高祖が漢王となり、杜南より斜中に入り、張良は送りて褒中に居たる）を開く。

■〔徐勉の無私と有能に心服〕冬，十月，壬寅（38-23+1=16日），五兵尚書の徐勉を以て吏部尚書と為す。勉は精力は人を過ぎ，文案は填積し，坐客は充滿すると雖も，應對は流れる如く，手は筆を停めず。又た百氏を該綜し，皆な為に諱を避ける。嘗て門人と夜集まり，客の虞嵩は詹事五官（太子の詹事にも五官掾あり）を求める，勉は正色して曰く、

「今夕は止だ風月を談す可し，公事に及ぶ可からず。」

時の人は鹹な其の無私に服す。

■（十月）閏月，乙丑（1+60-52+1=10日），臨川王の宏を以て司徒と為し，太子の太傅を行わしめ，尚書左僕射の沈約を尚書令と為し，太子の少傅を行わしめ，吏部尚書の袁昂（昂昂×）を右僕射と為す。

●〔高肇の勢い中外傾ける〕丁卯（3+60-52+1=12日），魏の皇后の于氏は殂す。是の時高貴嬪は寵有り而して妒なり，高肇は勢いは中外を傾け，后は暴^{にわか}に疾みて而して殂し，人は皆な咎を高氏に歸す。宮禁の事は秘にして，能く詳しくは莫かる也。

■甲申（ $20+60-52+1=29$ 日），光祿大夫の夏侯詳を以て尚書左僕射と為す。

●乙酉（ $21+60-52+1=30$ 日），魏は順皇后を永泰陵に葬す。

■十二月，丙辰（ $52-51+1=2$ 日），豐城（呉は富城県を立て、晉武の太康元年に改めて豐城とし、豫章郡に属す、江西省豫章道豐城県、現・宜春市豐城市）の景公の夏侯詳は卒す。

■乙丑（ $1+60-51+1=11$ 日），魏の淮陽の鎮都軍主の常邕和は城を以て來降す。

令和 4 年 9 月 19 日 翻訳開始 10092 文字

令和 4 年 10 月 8 日 翻訳終了 21979 文字